

常套句「考える葦」が生まれた背景と経緯

河 野 洋 子

1. 日本のパスカル研究と邦訳『パンセ』出版の経緯

(1) 日本におけるパスカル研究の経緯

現代フランスにおけるパスカル研究の第一人者、J. メナール (Jean Mesnard 1921-) は、彼の著書『パスカル (*Pascal*)』の「日本語版への序」において、日本におけるパスカル研究を次のように評価している。「フランス本国を別にすれば、パスカルが最も多く読まれ、諸大学で最も研究され、きわめて独創的な深い探求の対象となっている国は日本のほかにはない。(中略) まことに多彩なひとりの天才のさまざまな面を認めることにかけて、日本の人々は他のいかなる国の人々にもまさっている。」¹⁾ パスカルを生んだ本国を凌ぐほどの質的高さを有していると評価されるとすれば、それは昭和初頭から現在に到る層の厚いパスカル研究の蓄積がもたらしたものであると言えるだろう。

その出発点は、1926 (大正 15) 年の三木清 (1897-1945) による『パスカルにおける人間の研究』という独創的なパスカル研究の出版にある。フランス滞在中にパスカル研究に没頭した三木は、現地からすでに五編の論文を『思想』(岩波書店) に投稿し、帰国後最後の一編を書き足し一冊の本として刊行した。それが『パスカルにおける人間の研究』の誕生である。彼の独創性は、人間学を「生の存在論」として取り扱い、それを『パンセ (*Pensées*)』²⁾ に見てとった点にある。この著作は、あまりに時代に先行していたためすぐには反響を呼ばなかったが、やがて教養ある読者層に支持されるようになり、天才科学者パスカルを人間学に軸を置く思想家として新たなパスカル像を紹介した功績は大きい。

次に特筆すべきは、1933 (昭和 8) 年に湯浅誠之助がボン大学哲学部に提出した学位論文『パスカル哲学の実存論的基礎』(Die Existenziale Grundlage der Philosophie Pascals) が、翌 1934 年にドイツで刊行されたことである。これは、日本人がヨーロッパ言語を用いてヨーロッパで公にした最初のパスカルに関する論文だという点で画期的である。湯浅論文

を考察している内山稔の言によると、それは真摯な哲学的精神にもとづき、主体的に信仰の真実を追い求めるパスカルの哲学的営為を——主として『パンセ』を手懸りに——追体験しようというものと評される。「もっぱら救いの問題に焦点を合わせた思惟活動」を可能にする基盤を明らかにすることが論文のねらいであるが、湯浅は、パスカルにおける救いの確信を超越者の立場からではなく、人間の側から確認しようとしている。つまり、「人間の研究」が出発点となっているのである。ここには、三木の先導があったことを湯浅自身も認めているが、湯浅の哲学的研究の奥には三木には無かった真摯なるキリスト者としての信仰心があったと考えられる³⁾。

他方、日本国内でのパスカル研究は、1930年代初頭から東京帝国大学文学部において、若きフランス文学者、前田陽一(1911-1987)と森有正(1911-1976)によって対照的なパスカル研究の歴史を刻むことになる。この両者の生涯におよぶ対照的なパスカル研究のあり方については、塩川徹也(1945-)「〔補遺〕日本におけるパスカル」⁴⁾を参照した。

まず前田は、ソルボンヌ大学でレオン・ブランシュヴィック(Leon Brunschvicg)の指導を受けて『モンテーニュとパスカルとのキリスト教弁証論』と題する博士論文を1940(昭和15)年にパリ大学に提出するが、論文審査は戦争によって妨げられる。戦後になって、同論文は東京大学に提出され、1947(昭和22)年に彼は文学博士号を取得する。さらに、パスカル研究を生涯にわたる研究の中心に据えていた前田は、多くのパスカル研究者を養成した点においてもその貢献度は高く評価されている。こうした研究歴を有する前田の主なる業績は、全三巻からなる『パスカル『パンセ』注解』⁵⁾に集約されていると言える。

もうひとりの研究者森有正は、東京にあって戦争中もパスカル研究およびデカルト研究を続け、1943(昭和18)年に処女作『パスカルの方法』を刊行する⁶⁾。ところが1948(昭和23)年、森は戦後初のフランス政府給費留学生としてパリに渡り、全身全霊でフランス文化と接触することによって、彼のうちに知的な転換のみならず霊的な転換が引き起こされ、結局1976(昭和51)年に死去するまで終生パリでの生活を選ぶことになる。この間の注目に値する彼の業績は、パスカルの『パンセ』の一句に着想を得て印象的なタイトルを付した一連のエッセー、『バビロンの流れのほとりにて』『遙かなるノートルダム』などを次々に出版したことである。これらのエッセーは、1960年代から70年代にかけて、日本の多くの若者にフランス文学や思想への関心を呼び起こし、今に到るまで日本人のパスカル研究への興味や熱意を刺激しつづけていると言えるだろう。

文献的な厳密さと実証主義及び客観主義に基づく前田に対して、深い瞑想と生きた経験の

優位及び主観主義を重んじる森。このように、両者の研究態度とその方法論はどこまでも対照的であるが、彼らふたりが日本のパスカル研究の発展に決定的な寄与をもたらしたことは紛れも無い事実である。

その後、1960年から1970年にかけて日本人がパスカルについて書いたもの（単行本、雑誌・紀要論文等）の総計は230編に及び、質量ともにすぐれたパスカル研究の進展状況は継続している。支倉崇晴（1937-）の調査⁷⁾によるとパスカルに関する博士論文と学位の取得状況については、日本語で書かれたものでは和田誠三郎（1963年、大阪大学）と田辺保（1975年、京都大学）、フランス語で書かれフランスの大学より学位が授与されたものでは、岳野慶作（大学博士、1961年、パリ大学）、原亨吉（第3期博士、1965年、パリ大学）、大友浩（大学博士、1970年、ボルドー大学）、末松壽（大学博士、1970年、パリ大学）、塩川徹也（第3期博士、1975年、パリ大学）が挙げられる。そして、塩川の博士論文『*Pascal et les Miracles* パスカルと奇跡』は、J. メナールの高い評価を受け、1977（昭和52）年、パスカルについて日本人がフランスで出版する最初の本となった。この他、松浪信三郎（1913-1989）や赤木昭三（1928-）の業績も特筆に値すべきものであるが、とりわけ博士論文『パスカルとその時代』⁸⁾の著者、中村雄二郎（1925-）の仕事は、戦前の三木清に通ずる役割を果たしていると言ってよい。

個人のパスカル研究とは別に、1944（昭和19）年には、森有正、串田孫一（1915-）らが「パスカル研究会」を発足させる。その研究会の模様がうかがえる日記を串田自身が記している。空襲激化のため研究会は中止とならざるを得なかったが、そんな空襲の恐怖と危険の中を、パスカルに関する講義を聴きに教室には溢れるばかりの人々が集まったという。その理由の一つとしては、すでに数々の抄訳や解説書などでパスカルがかなり知られていたということ、また他方では、明日の《生》すら覚束ない不安と恐怖のどん底にあって、人々はパスカルに自己の存在理由を、人生の意味を、そして魂の慰めを求めていたからであろう⁹⁾。串田は、東京大学哲学科の出身であり、パスカルに限らず哲学的著作も少なくないが、彼を著名な文筆家として知らしめるのは、随筆・エッセーというジャンルにおいてである。その串田がパスカルについて書いた有名なものとしては、『考える葦』（雲井書店、1951年）、『永遠の沈黙——パスカル小論』（筑摩書房、1946年）などがある。前者はパスカルの思想とは直接的関係をもたない随筆であるが、『パンセ』の名句を題名に付した両著作はともに版を重ねていることから、多くの読者を得た書物であることが推察される。つまり、串田の著作活動がもたらした功績は、パスカル研究を学術研究の枠に囲い込まず、一般のパスカル

愛好家の裾野を広げることに重要な一翼を担ったと考えられることである。

そして、1963（昭和38）年には再び、前田陽一、由木康（1896－1985）を中心に「パスカル研究会」が結成される。この研究会は戦時下のものと同様、大学の研究者とアマチュアをつなぐ貴重な研究の場を提供するものであり、やがて全国規模の研究会へと発展し、パスカル研究の海外向け窓口の役割をも果たすようになっていった¹⁰⁾。

三木清の『パスカルにおける人間の研究』が世に出てから、やがて80年が経つことになる。その間、国内外を問わず多くの日本人パスカル研究者によって研究実績が積み重ねられてきた事実は言うまでもないが、在野のパスカル研究者や愛好家の貢献、また幅広いパスカルの読者層の存在によって、日本のパスカル研究が支えられ推し進められてきたことを軽視するわけにはいかないだろう。

（2）邦訳『パンセ』出版の経緯

パスカルの未完の断章集『パンセ』は、まず護教論としてキリスト者のあいだに、また優れた文学、哲学・人間学の著作として学究の徒のあいだに、そして文芸書・人生の書として一般教養人のあいだにと、広範で異質な領域に読者層を有する作品である。

『パンセ』をはじめとするパスカルの著作が、多くの日本人読者を獲得している大きな要因の一つは、おそらく邦訳の充実ぶりにあると言えるだろう。最初の全集の公刊は、1959（昭和34）年に人文書院から出版された『パスカル全集』（全三巻）である。その後、1980－84（昭和55－59）年には、教文館から田辺保全訳の『パスカル著作集』（全九巻）が出版された。現在も、白水社から『メナール版パスカル全集』（全六巻）の公刊が1993（平成5）年に開始され、現在第二巻まで刊行済みである。また、『パンセ』に限れば、最初の全訳は1948（昭和23）年に刊行されたが、それ以降、主要なものでも五種類の邦訳が出版されており、そのうちの三つは文庫にも収められて、現在も容易に入手することが可能である。これらの代表的刊行物を中心に、邦訳『パンセ』の刊行にかかわる経緯の概略を以下に紹介する。

『パンセ』の断章が部分的に邦訳されて日本の著作物に登場し始めるのは、19世紀の終わり頃である。まず宗教・思想の領域においては、1883（明治16）年に植村正久（1858－1925）が、キリスト教批判に対する反論に際して『パンセ』や『プロヴァンシャル（*Provinciales*）』からの引用を用いた。さらに翌年植村は、キリスト教擁護の書『真理一般』を著し、『パンセ』断章（397）をはじめとして、全9章のうち3章にわたってパスカルを引

用している。1890（明治23）年には、カトリックの『公教雑誌』第17号に「考える葦」の断章を含むいくつかの断章が翻訳紹介された。これには訳者名が明記されていないが、後に『パスカル感想録』を訳出した前田長太（1867-1939）であろうと推測されている。支倉崇晴の研究¹¹⁾によれば、20世紀に入ると、新渡戸稲造（1862-1933）によるパスカルへの言及が目につくと言う。1903（明治36）年に「クリスマス所感」と題して発表された新渡戸の文章は、その後1907（明治40）年に『随想録』として刊行される。これに続くように『パンセ』にかかわる文章が、毎年各領域から出版される。1908（明治41）年には、植村正久の「ブレエイス・パスカアル悔改の由来」が週刊誌「福音新報」（656、657号）に、1909（明治42）年には川島全五郎の「パスカルの感想録を読む」が「哲学雑誌」（265号）に、そして1910（明治43）年には広瀬青波（広瀬哲士）訳「パスカルのパンセ」が、総合雑誌「日本及日本人」（三宅雪嶺主宰、政教社刊）に断続的に11回連載される。これは、ブランシュヴィック版の断章（4）から（233）までが訳出（抄訳）されて、一般文芸物と並んでパスカルが扱われた点で画期的な出版物である。

哲学・思想の領域で特筆に値するものとしては、1911（明治44）年に、パスカル研究の起点となった三木清の師である西田幾多郎（1870-1945）が、近代日本哲学の記念碑的著作『善の研究』の第三篇・第三章「意志の自由」の項において、「考える葦」の断章を次のように引用していることである。すなわち、「パスカルも、『人は葦の如き弱き者である。併し人は考える葦である、全世界が彼を滅ぼさんとするも彼は彼が死することを、自知するが故に殺す者より尚し』」¹²⁾といている。

1914（大正3）年には、前田長太（越嶺）訳『パスカル感想録』（洛陽堂）が単行本としては初めての邦訳『パンセ』として刊行された。その後1934（昭和9）年に、竹村清訳『パスカルの随想録』（新生堂）も刊行されたが、これらはまだ抄訳である。ついにはじめての完訳が刊行されるのは、先述したように1948（昭和23）年の由木康訳『パスカル随想録』（上・下）¹³⁾である。由木は戦争中に多くの苦難のなかで完訳を成し遂げたが、刊行にも大きな苦難が伴い、訳了後9年を経てついに刊行が実現したものである。

この後は、現在まで刊行が続く主要な邦訳『パンセ』が続々と刊行されることとなる¹⁴⁾。主な邦訳『パンセ』は以下のとおりである。

◇津田穰訳『パンセ（随想録）』新潮社、1950（昭和25）年。（現在、新潮文庫上・下2巻）

◇関根秀雄訳『パンセ』創元文庫、1953（昭和28）年。（テュルヌール版に依拠）

◇松浪信三郎訳『パンセ』河出文庫、1955（昭和30）年。（1959年に『パスカル全集』第3巻に所収）

◇前田陽一／由木康共訳『パンセ』中央公論社、1962（昭和37）年。（『パスカル（世界の名著第24）』所収）1973（昭和48）年には同『パンセ』が中公文庫となり、1978（昭和53）年には前田陽一責任編集により、中公バックス版『パスカル』『世界の名著29』にも入った。

◇田辺保訳『ラフュマ版によるパンセ』新教出版社、1966（昭和41）年。

◇松浪信三郎訳『定本パンセ』上下2巻、講談社文庫、1971（昭和46）年。（ラフュマ版に依拠）

◇由木康訳『パンセ（改訳新版）』白水社、1978（昭和53）年。

◇前田陽一／由木康共訳『パスカル パンセⅠ・Ⅱ』中央公論社（中公クラシックス版）、2001（平成13）年。これは刊行されたばかりの最新版である。

上記の通り、数々の邦訳がさまざまなタイトルのもとに出版されてきたが、現在では『パンセ』が作品名として日本人の間に定着している。依拠する版について特に記述していない出版物については、これまで邦訳本の底本として最もポピュラーなブランシュヴィック版に依拠することを表わしている。

このように、『パンセ』の邦訳本は完訳版になってからでも、すでに60年間にわたって日本人に読みつけられていることになる。また、『パンセ』のページをめくったことはなくとも、『パンセ』という題名を耳にしたことのある人は決して少なくないだろう。パスカルによって創出されて『パンセ』においてはじめて紹介された表現でありながら、いつの間にか『パンセ』をはなれて一人歩きしている名言はいくつもある。「クレオパトラの鼻」や「考える葦」はその代表的名句であり、これらは『パンセ』を知らずとも耳慣れた名言として日常の言語生活のなかで用いられることはそう稀ではない。『パンセ』に登場する比喩言説は、名言もしくは格言・ことわざとして遠く離れた日本において、日常言語のなかに位置づいて人々の語りのなかに自然に現われる表現となっている。

2. 教科書に登場する「考える葦」

（1）パスカルの思想の紹介

「考える葦」が教科書にはじめて登場したケースだと推察されるのは、1934（昭和10）年に北星堂から出版された河野正通編注「*The Thoughts of Blaise Pascal, selected with*

notes by M. Kohno (英語学習用教科書)]¹⁵⁾である。ここには、『パンセ』の代表的な断章が8章編成で掲載されている。その第3章「人間の偉大と卑小 (The Greatness and Littleness of Man)」には、『パンセ』から23の断章が選出され配列されている。そのなかに、「考える葦」および「人間は自然の中で最も弱い一本の葦にすぎない、だがそれは考える葦である」という言説が登場する。これは、『パンセ』のなかに見出されるパスカル思想の中核部分をまとめ上げた哲学的内容の英語読本である。この教科書は、国定教科書および検定教科書一覧のなかには登録されていないが、内容からみて旧制中学校で採用されていた可能性があるのではないかと推測できる。

上記の教科書に取り上げられた様態とほぼ同様に、パスカルという思想家についての概説とその代表的名言として「考える葦」を紹介しているのが、串田孫一が著した「考えるあし」というタイトルの文章¹⁶⁾である。串田の「考えるあし」は、1950(昭和25)年発行の『新生国語読本1下』(波多野完治監修、富山房)に掲載されている。これは、筆者が調べた限り、義務教育の検定教科書に「考えるあし」という表現が登場した最初のケースである。ただし、この教科書の出版は翌年度で終了あるいは打ち切りとなり、これ以降パスカル思想の紹介を意図して「考える葦」が取り上げられることはなくなる。この時点で一度、「考える葦」と教科書の関係は中断する時期を迎えることになり、再度登場するまでには約10年を経ることになる。

(2) パスカルの格言・名言の紹介

「考える葦」の取り上げ方には、教科書編集の基本方針の動向が影響していると見られる。この点に関しては、東書文庫展示資料の一つ「戦後の国語教科書とことわざ・格言」に示されている教科書の編集傾向についての指摘が有力な手がかりを与えてくれる。

「1952(昭和27)年から2000(平成12)年までの48年間にことわざを扱った教科書は71件あるが、明治期のように正面から取り上げるのではなく、コラム的に扱うことが多く、どちらかというと低調になってきていた。ところが1957(昭和32)年、柳田國男編集の『新しい国語 中学一年下』(東京書籍)では〈ことわざ〉を真正面から取り扱った。柳田の編集の基本方針は、今までの教科書のように純文学・芸術によらないで日常の言語生活に必要な能力を育てることであった。」¹⁷⁾

大手教科書出版会社である東京書籍と著名な民俗学者・柳田國男(1875-1962)によってつくられた教科書編集の基調が、他の教科書出版の編集方針に影響を与えたであろうことは十分に推測できる。柳田の編集への参画は、この後1962(昭和37)年発行の教科書まで継続していたが、この間に復活した、いわゆる〈ことわざ・格言路線〉は、「考える葦」が国語教科書に格言もしくは名言として取り上げられる事態に影響を及ぼしたと考えられる。以下のような事態が、そのことを物語っていると言えないだろうか。

1951(昭和26)年以降、教科書から姿を消していた「考える葦」が再び教科書に登場するのは、1962(昭和37)年発行の『中学国語2年』(佐藤春夫監修、大阪書籍)に掲載された松浦佐美太郎(1901-1981)の随筆につけられたタイトル「考えるあし」によってである。松浦の「考えるあし」は、「考えること」が特別な難しい行為ではなく、人が日常的に行っている行為であることとして、中学生に「考えること」のすすめを説く文章である。内容からみる限り、パスカルにも『パンセ』にも関連性は見当たらないが、『パンセ』に登場する比喩「考えるあし」をそのタイトルとして採用していることは明らかである。ここに用いられた「考えるあし」は、『パンセ』の文脈に位置する比喩として意味することとは全くと言っていいほど無関係に、ひたすら「考えること」の重要性を喚起することを目的とした、半ばスローガ的な役割を果たしている。その意味で、この「考えるあし」は、もはや単なるタイトルではなく、「考えること」の重要性を教訓的に示している極めて簡潔な格言であると言えるだろう。

同年発行の『新中学国語2』(石井庄司監修、大修館)のなかでは、「考える葦」(格言)という見出しのもとに、「人間は一本の葦にすぎない。自然のうちで最も弱い葦にすぎない。しかし、それは考える葦である。」という一節が、パスカルの格言として取り上げられている。ここに併記されている格言の出処は、エジソン、孟子、戦国策、福沢諭吉らである。

さらに同年発行の『中学国語3』(山本有三編集、日本書籍)では、「考えるアシ」という目次のもとに、デカルト、パスカル、タゴール、シュバイツァー、ベートーベン、ゲーテ、チャーホフ、ローレンス、アンドレ・ジイド、ミレー、アインシュタイン、内村鑑三、本居宣長、三木清らの名言が紹介されている。『パンセ』からの引用部分は、上記の教科書の掲載文とはほぼ同様であるが、デカルトの言葉と併記され、真の懷疑の難しさを述べる三木の文章の引用を最後に配置した、その順序や形態に編集の意図がうかがえる。ここでは、教訓的な格言としての紹介というよりは、各界の著名な人物の名言が相互作用的に多様な視点の在りようを示すことを意図した取り上げ方であることが推察される。

同上教科書『中学国語3』は、1969（昭和44）年版でも同様に「考えるアシ」という目次のもとに、パスカル、デカルト、論語、河合栄治郎、六代目尾上菊五郎、ゲーテ、エジソン、チャーホフ、吉野作造らの名言を紹介している。ただし、『パンセ』からの引用は「考える葦」にかかわる断章のほぼ全体を掲載した点に変化がみられる。つまり、単に格言もしくは名言として象徴的な言葉を紹介するのではなく、名言が意味する内容をより忠実に伝え、読者である生徒の思考を促すことを意図する取り上げ方である。ところが、同社の1972（昭和47）年以降の版からは「考える葦」にかかわる記述は完全に姿を消し、筆者の知る限りではその後現在に到るまで中学校の国語教科書に「考える葦」が登場することはないのである。

（3）モラリスト・パスカルの紹介

中学国語教科書から姿を消した「考える葦」は、その後高等学校の倫理社会の教科書に場所を移して登場するようになる。その最初は、1972（昭和47）年に検定を経て1973（昭和48）年に発行された『倫理・社会』（中村元他著作、東京書籍）である。ここでは、「西洋近代思想の展開」という章を構成する〈合理的精神の確立〉という節の中心的思想家としてデカルト（Rene Descartes, 1596-1650）を取り上げた後に、こうした思想の流れのなかにありつつも固定的な人間観では割りきらないモラリストの存在を補足的に取り上げ、その代表者としてモンテーニュ（Michel Eyquem de Montaigne, 1533-1592）とともにパスカルを紹介している。そこに引用された「考える葦」の解釈は、つまるところ「人間の偉大さは考えるところにあるのだから、考えることによって自らを高めなければならない」と結論づけられたものである。その後も1980年代の初旬までは、パスカル並びに「考える葦」の記載はこれ以外には見られない。このような状況のなかで最も早い時期に『パンセ』の記述に忠実な「考える葦」の詳細な解釈を紹介したのは、1983（昭和58）年発行の『倫理』（勝部真長他著作、中教出版）である。これ以降は徐々に記載教科書の数が増えてくるものの、1997（平成9）年時点でもまだ出版教科書の半数にも満たない状況であった。ところが現行の教科書——検定：2000（平成12）年、採用：2002（平成14）年——では、パスカル及び「考える葦」についての記述を掲載する出版社数は、（筆者が調べたなかでは）10社中9社に及ぶ掲載率の高さである。

モラリストとしてパスカルを紹介する点では各教科書ともほぼ共通しているが、モラリスト自体の位置づけは著作者（出版社）によって異なる。そこで、現行の倫理社会の教科書に

おける「考える葦」の取り上げ方を考察してみると、おおよそ三つのタイプに分類できる。大多数の教科書はこの項の見出しを構成するキーワードとして「人間の尊厳」という表現を使っているが、「人間の尊厳」をどの次元で捉えるかによって記述に差異が生じている。第一のタイプは、人間と自然（人間以外の動物を含む）との相違点を合理的精神や理性に見出し、そのために「考える」という営みを唯一可能とする人間の優越性を人間の尊厳と捉え、その点を「考える葦」の解釈として強調している。第二のタイプは、人間が本来的に有する悲慘と偉大を自覚することが人間の尊厳であるとの理解に立ち、こうした人間の存在性についての自覚が重要であることを指摘する。ところが、悲慘と偉大の間にいる中間者としての人間の在りようを「考える葦」の解釈として示してはいるが、悲慘の理由については言及していない。第三のタイプは、第二タイプと同様に人間の悲慘と偉大の自覚を指摘し、さらに悲慘の理由として人間とそれを超えたもの・神との関係のあり方に言及する。つまり、有限性を自覚する人間として、人間を超えたものへの服従、神への信仰にこそ、人間の尊厳があることを説いているのである。

以上が、教科書の記述に見られる「考える葦」の取り上げ方の推移である。

3. 常套句となる「考える葦」

(1) 「考える葦」をめぐる通念とレトリック

『パンセ』には、このような記述がある。

「エピクテトス、モンテーニュ、サロモン・ド・テュルティなどの書きぶりは、最もよく用いられ、最もよく人の心に食い込み、最もよく記憶に残り、最もよく引用される。というのは、それが日常生活での話題から生まれた思想ばかりから成り立っているからである。(18)」

ここに名指しされているサロモン・ド・テュルティ (Salomon de Tultie) とは、『パンセ』の仮名の語り手として想定された人物である。したがって、上記の書きぶりについての評価は『パンセ』の文章自体への言及だと考えてよいことになる。そこで、上記断章の内容は、こう言い換えられないだろうか。つまり、『パンセ』の書きぶりもしくは語り方は、説得的な通念に基づいた言論の知識、すなわちレトリックの知識に満ちたものであると。「レトリックは、直接事物を探究するのではなく、言論に関する知識である。これに対して、哲

学は、直接事物がなんであるかを探求するものであり、そこに成立するのは事物についての知識である。」¹⁸⁾ パスカルの文章、特に『パンセ』の文章が、通念もしくはレトリックの知と哲学的思索との関係性のなかでどこに位置づけられるのかは、興味深いところあるが、塩川徹也が示す次の判断は、この点を非常に明解に言い当てていると思う。

「多くの読者にとって、パスカルの思索は、ことわざや金言に凝縮された俗智から本来の意味での哲学に至る道筋の半ばに位置しています。それはいわば、哲学的な回心、世界内存在としての人間の自覚への手ほどきなのです。とりわけこの役割をよく果たしているように思われるのが、日本の読者に熱烈に迎えられた『考える葦』の断章（347）です。ただし、大多数の読者がそこに、身体的存在としての人間の脆弱と卑小との対比で、ひたすら『思考（パンセ）』の偉大さに注目する傾向があることは否定できません。」¹⁹⁾

「考える葦」は、本来『パンセ』の文脈にあっては単なることわざや金言の域に留まるものではなかった。ところが、上記引用の最後の文が指摘するように、現在一般的に「考える葦」が与えるイメージは、「考える」が肥大化した人間像である。これが、常套句となった「考える葦」が伝える俗智ないしは通念と言うべきなのであろうか。俗智（通念）と哲学の中間に位置するのが『パンセ』の「パンセ（思索）」であるならば、パスカルが創出した当初の「考える葦」は、現在のような格言風ことわざとして俗智を伝えるだけのものではなかったはずである。しかしながら、皮肉にも俗智を伝える常套句となったがゆえに、創出から350年近く経過してもなお広く流通する比喩表現として生き残る運命を得ることになったのだと言える。

（2）常套句「考える葦」の形成・定着過程

「考える葦」が、ここまで常套句化した背景としては、以上の各節で述べてきたように、まず、日本においてパスカル及び『パンセ』の研究が質量ともに充実していたこと、その影響もあって邦訳『パンセ』の出版も早い時期に始まり、訳本の種類も豊富であり、現在に到るまで版を重ねて根強い読者層を獲得していることが挙げられる。それに加え、「考える葦」をタイトルとして採用した二冊の『考える葦』が1951（昭和26）年に出版されたことは、「考える葦」という表現が存在することのアピールに力を添えることになったと考えられる。

このうちの一冊は、松浪信三郎によるパスカル及びパスカルの著作に関する研究書²⁰⁾であり、もう一冊は串田孫一による随筆²¹⁾である。このような文化的基盤を背景に、戦後になってからは義務教育期の中学国語科の検定教科書に取り上げられ、それが高等学校の「倫理社会」に引き継がれながら教科書に登場し続けてきた経緯に、常套句「考える葦」を生んだ重要な要因があると判断できる。そこで、学校教育のなかに持ち込まれた「考える葦」が、どのような役割や効果をもたらしたかについて、以下に考察していきたい。

すでに複数の、しかも版を重ねた著作の書名として世に出ていた「考える葦」という表現が、文章のタイトルとして国語教科書の目次に現われるという事態が生じた。「考えるあし」がタイトルに用いられるということは、「考えるあし」自体がすでに十分な知名度と表現としてのインパクトをもっていることを証明している。また、「考える葦」ではなく「考えるあし／アシ」と表記した理由としては、当該学年に許容されている漢字の枠組みを考慮した結果であることは第一に考えられるが、「考えるあし／アシ」という表記の方が抽象度が高く自由なイメージを喚起させやすいという効果もうかがえる。語りのなかで音声として「かんがえるあし」が伝えられる場合には特に、「かんがえる＝考える」の方が、否むしろ「考える」のみが人々の印象に残っていくのではないだろうか。

教科書においては、〈格言〉と明記して「考える葦」を目次に載せたケースがあり、また有名な思想家・芸術家等の〈名言〉という意味あいを暗に示して「考えるアシ」を目次に載せたケースもある。教科書以外について言えば、例えば『世界ことわざ名言辞典』²²⁾では、「考える葦」にまつわる一節は〈ことわざ名言〉として扱われているが、訳者はより狭義に〈名言〉として捉えていることがその記述から推察できる。このように、格言・名言・ことわざは、明確に区別することがむずかしく、通常ほぼ同義語のように使われているのが現状である。ことわざ研究家・北村孝一(1946-)でさえ、彼の著作のなかでしばしばこれらを区別なく使用している箇所が見うけられるほどである。

このように区分することがむずかしい〈格言〉と〈ことわざ〉であるが、まずは、広辞苑による定義の違いを見てみよう。そこには、〈格言〉とは「深い経験を踏まえ、簡潔に表現した戒めの言葉。金言。箴言。」とある。それに対し、〈ことわざ〉とは「古くから人々に言いならされた言葉。教訓、風刺などの意を寓した短句や秀句。」と述べられている。そこで、この定義に先に紹介した北村の定義を重ねてみると、それぞれの輪郭がもう少しはっきり見えてくる。北村は次のように両者の違いを指摘している。「〈格言〉は抽象性が高く倫理道徳性を強調したものが多く、それに対し〈ことわざ〉は民俗性(口承性)・庶民性に富んでお

り、比喩を用いることが多くユーモア感覚（笑い）を重視する傾向が強い。』²³⁾

国語教科書においては〈格言〉と明記して取り上げられたことのある「考える葦」であるが、「人間は考えるものである」くらいの理解で人々の日常の言語生活に定着しているのが「考える葦」であるとすれば、北村の説からすると〈ことわざ〉として捉えるのが妥当な見方ではないだろうか。言うなれば、「考える葦」は〈格言的要素を備えたことわざ・格言風ことわざ〉と言えるだろう。

こうした意味で、ことわざの定着過程について調べてみると、北村の著述のなかに注目すべき指摘がいくつかある²⁴⁾。もちろん個々のことわざによって異なるが、定着のための第一条件として「近代日本では学校教育、とりわけ国定教科書の影響を無視できない」こと、そして教科書に登場して浸透効果の高い格言・ことわざとなるものは「おおむね抽象的な命題で、教訓を引き出せる格言的要素の強い表現」が多いという指摘である。また第二の条件としては、人々の「感性にフィットし、ことわざが本来持っている比喩的な説得力によって共感を得る」ことができるか否かという点に関する指摘である。

上の条件に照らし合わせてみると、「考える葦」が義務教育の教科書に登場したという事実をはじめ、「かんがえるあし」という言葉のもつ響き、そして「考える」に伴う近代的価値への志向が、「考える葦」の常套句化を推し進めたと判断することは無理のないところである。

「考える葦」が義務教育段階の教科書に継続的に登場した期間は10年間であり、これを取り上げた教科書会社は3社程度にすぎない。この数字が果たす効果を、戦前の国定教科書の記述が与えた国民への絶対的な普及・浸透効果に比べれば、教科書が「考える葦」の普及と定着に関して圧倒的な影響力を及ぼしたとは考えにくい。しかしながら、「人間は一本の考える葦である」が義務教育の教科書に一時期登場したことは、それ以降の学校教育領域で〈格言風ことわざ〉として独自の位置を確保しつつける契機として効果的であったことは、あながちまちがった推測ではないはずである。

『パンセ』の一断章、さらにその断片である「人間は〈考える葦〉である」は、国語教科書から姿を消した後も「人間は〈考える者〉である」という程度の理解と主張を携えて、学校教育を中心とする近代日本の合理的・理性的志向と高度経済成長期の学歴重視型の日本社会の要請にマッチして、日常生活に根差した〈格言風ことわざ〉として定着していったと言えるだろう。この間の「考える葦」の知名度を支えた背景には、義務教育にかかわって登場場所を与えた高校の倫理社会の教科書のはたらきがある。前節に述べたように、この段階で紹

介される「考える葦」は、西洋近代思想史の流れのなかの一思想家であるパスカルの思想を象徴する概念的表現として取り上げられている。とりわけ1998年以降の倫理社会の教科書では、近代合理主義的・理性中心的ではなく、むしろその傾向を問い直すスタンスへと移行する動きのなかで重要な思想家としてパスカルを位置付け、彼の人間観を象徴する「考える葦」を『パンセ』に即して忠実に解釈した記述が多くなってきている。ところが、この教科書によって授業を受けた世代にあっても、人間が思考力を持っていることの優位性を示す言葉として「考える葦」が受け取られている傾向は依然として根強い。それ以前の世代がもっている「考える葦」への印象的理解と大差がないというのが、現役大学生を対象にしたアンケート調査²⁵⁾の結果に対する実感である。

教科書の詳細な記述内容が変化しようとも、それを受け取った側に残る印象的理解に大した変化が見られないということは、何を意味しているのだろうか。

一つの解釈としては、すでに常套句としての「考える葦」が、日常言語生活のなかに根づいて固定した意味の枠組みを形成しているということ。もう一つの解釈としては、倫理社会の教科書における「考える葦」は、概念レベルの刺激を引き起こし、読者の新しい思想形成に働きかけるという役割を担ったのではなく、思想史上の一つの知識として読者の記憶レベルに働きかけたに過ぎないということ。以上の解釈が、常套句「考える葦」が通念的意味を保持しつづけている理由として考えられる。

学校教育において、意図的・目的的に「考える葦」を使っているという意識は、少なくとも最近の教師にはほとんどないと言ってよいだろう。つまり、すでに常套句化していて、話し手にも聞き手にも特別な意識を喚起させることがなく、また違和感を生じさせることもなく、時に応じて自然に語られる比喻表現の一つとなっているということである。すでに、「考える葦」が比喻であるということすら意識されていないかもしれない。仮に『パンセ』との関係を知らないにしても、「考える葦」という言葉を知らない教師はおそらく極めて稀であろうが、彼らの語りのなかで「考える葦」が「考える存在・者」と同義語のように繰り返し使われてきた結果、「考える葦」が学校文化ないしは日本文化のなかで常套句、いわゆる決まり文句として根づくことにはかなりの貢献をしていると思われる。教科書での出会い以後「考える葦」は、主に口頭伝達されてきたことによって、言い換えれば、音声——話しことば——として流通する機会が多かったために、複雑な思想的意味を無視して、人々の記憶に残りやすい「音・響き」として定着した可能性が高い。それが証拠に、「あし」が「葦」であることを知らない人々や、「葦」が何であるかを知らない人々は少なくないのが実情で

ある。日本語の「音・響き」として、日本人の感性に違和感を生じさせない表現であるがゆえに、「考える葦」は常套句として定着したと言える。

このような過程を経て、「考える葦」は近代学校教育の所産として、今や常套句として一人歩きができるようになったのである。しかし同時に、常套句もしくは〈格言風ことわざ〉となったがゆえに、「考える葦」は近代教育学の研究対象としての価値を手放すことになったのかもしれない。なぜなら、学際的にことわざ研究が始まったのは、世界的にも1960年代以降であり、日本では1980年代後半になって漸く盛んになってきたのが現状であるからである²⁶⁾。柳田の言でも紹介したように、ことわざが純文学や芸術の次元ではなく、日常の言語生活の次元にあるものだとなれば、ことわざに関する研究が従来の学問研究の水準を満たすものとして容易に認められなかったであろうことは想像に難くない。「考える葦」が〈ことわざ〉に分類されるとすれば、これについての研究が教育学領域でも稀有であることの有力な理由の一つになり得ると考えられる²⁷⁾。

(3) 常套句「考える葦」が隠蔽するもの

「ことわざとして本当に生命力があれば、いったん定着した表現は、義務教育という強力な装置がなくても、(中略)どこかで復活するはずである。」²⁸⁾ 北村がこう指摘するように、常套句となって流通し続けている「考える葦」は、見事に「生命力」が潜在していたことを証明していると言えるだろう。

谷川俊太郎はもまた、北村とは異なる角度からではあるが、ことわざの「生命力」について興味深い見方を提起している。それは、おおよそ次のような指摘である。「古くからあることわざを、いわば本歌取りする要領で、パロディ的な新しい表現が時代ごとに生み出されるが、そこには知恵と言ってもいいものすら含まれており、それが古いことわざによって触発されて出てきたところに、ことわざというものの生命力の強さがある。」²⁹⁾

「制度化された古いことわざに対して、自分たちのレトリックを使って反撃を加える。」³⁰⁾ 谷川はこの手法に、ことわざに不可避な新陳代謝を生じさせる一つの可能性を見出している。筆者の他の論考における試みもまた、陳腐なことわざに差異を仕掛けて再解釈を試み、再び革新的な意味が発現されるように生命力を吹き込むことを意図するものである。常套句の差異化というねらいにおいては類似点を共有していると思われるが、その方法においては明らかな違いがある。谷川の説が、類似してはいるが異なる新しい表現によって新陳代謝を図ろうとするのに対して、筆者の試みは、既存のことわざの構造を用いて、全く同じ古いことわ

ざに新陳代謝を仕掛けることである。

この意味において、貴重な歴史をもつ常套句としての「考える葦」を、単なる俗智や通念的理解に閉じこめておかずに、新たな意味を発現させる言葉の装置として注目してみたい。そのためには、臨床教育学がその方法論として用いるレトリック論的解釈学的手法によって、「考える葦」のレトリック論的な認識構造に着目することが有効に機能するはずである。なぜならば、皇紀夫(1940-)が指摘するように、「常套句は、擦り減ったマンホールの蓋のように、日常のコミュニケーションを円滑にする役割を果たすと同時に、それは使い手たちの思考と行動と知覚を陳腐化させる」^[91] 機能をもつものだからである。それならば、使い手の陳腐化した思考と行動と知覚を揺さぶり差異化することによって、新しい意味世界の出現の可能性が見えてくるし、そのためには、言説の仕組みの解明に基づくレトリック論的手法こそが有効なのである。

護教論としての『パンセ』の性格上、「考える葦」自体もまずキリスト教の領域で紹介されたときには「宗教性」を帯びた人間の在りようを、次いで哲学・人間学の領域で注目されたときには、矛盾する主体としての人間の在りようを象徴的に表す比喩として受け取られていた。ところが、戦後、義務教育の教科書に掲載されるようになってからは、「考える葦」から「宗教性」は完全に漂白され、残ったのは近代的理性の代名詞「考える」に収斂した教訓的・啓蒙的イメージばかりである。この現象こそ、皇の言に則して「思考と行動と知覚の陳腐化」と呼ぶに匹敵するだろう。

「考える葦」が、〈格言風のことわざ〉として日常の言語生活のなかで常套句化したことは、学校教育の領域においては「宗教性」を考慮することなく自由に使用できる比喩表現となったことを意味している。しかし果たして、「考える葦」はもはや「宗教性」を完全に剥奪された陳腐な比喩でしかないのだろうか。「考える葦」が常套句であることによって固定されている意味にねじれを起こさせ、そこに隠蔽されている意味を出現させるには、どうしても言語的仕組みについての解明に基づいた「考える葦」再解釈の必要性が生じてくるのである。

❖註

- 1) J. メナール著・安井源治訳『パスカル』みすず書房、1992年〔初版1971年〕
- 2) Blaise Pascal, edition de Michel Le Guern, *Pensées*, Gallimard: Folio classique, 1977. Blaise Pascal, translation by A. J. Krailsheimer, *Pensées*, London: Penguin, 1995. 本文中の引用句に付

記したフランス語及び英語の表記は、上記の著作による。また、本文中の日本語表現は、主に次の二編の邦訳本からの引用である。①B. パスカル著・前田陽一他訳『パンセ』、『パスカル』（世界の名著 29 巻）所収、中央公論新社、1999 年。②B. パスカル著・由木康訳『パンセ』白水社、1999 年。これ以降の本文中への『パンセ』からの引用文には、ブランシュヴィック版(上記訳書)に基づいた断章番号を括弧に入れて付記している。なお引用文の表現は、邦訳本に基づいているが、原典の表記を確認し、英文訳をも参考に行っているため、引用者による表現の変更があることを断っておきたい。

3) 湯浅誠之助の博士論文についての内容的解説については、内山稔「求道の士パスカル——故湯浅誠之助氏のドクトル論文によって」『理想』1981 年、7 月 (No. 578) 所収、116-125 頁を参照した。

4) 塩川徹也『パスカル考』（岩波書店、2003 年）所収の論考から 287-294 頁を参照した。

5) 前田陽一『パスカル『パンセ』注解』全三巻（未完）、岩波書店、1980-88 年。

6) 森有正のパスカル関係の論考は、『森有正全集』（筑摩書房、1978-82 年）の第 10・11 巻に所収されている。

7) 支倉崇晴「日本におけるパスカル研究史（一）」（田辺保訳『パスカル著作集』1980 年、教文館、月報Ⅱ所収）

8) 中村雄二郎『パスカルとその時代』は、東京大学出版会から 1965 年に初版が出版されている。

9) 西川宏人「日本におけるパスカル受容の変遷」、関東学院大学文学部「人文科学研究所報」第 5 号、16-17 頁。

10) 支倉崇晴「『パスカルと日本』その後」『パスカル（世界の名著 29）』附録参照。

11) 支倉崇晴「日本におけるパスカル研究史（三）」（田辺保訳『パスカル著作集』1980 年、教文館、月報Ⅳ所収）

12) 西田幾多郎『善の研究』岩波文庫、1998 年〔初版 1950 年〕、144 頁。

13) プロテスタントの牧師であった由木康は、ブランシュヴィック版を底本として邦訳『パスカル瞑想録』（上・下）を白水社から刊行した。

14) 1978 年までの『パンセ』刊行の歴史については、西川宏人「日本におけるパスカル受容の変遷」、関東学院大学文学部「人文科学研究所報」第 5 号、1981 年、5-29 頁を参照した。

15) *The Thoughts of Blaise Pascal translated from the text of Auguste Molinier by C. Kegan Paul*, London: George Bell and Sons, 1905. より抜粋したもので、巻頭に 2 ページの Life of Pascal が掲載され、巻末には 3 ページからなる注が付されている。

16) 串田のこの文章は、『中学生全集：6』として刊行された、串田孫一著『世界の思想家』（筑摩書房、1950 年）の「パスカル」と題する項にも所収されている。付言すれば、『世界の思想家』は、1958 年までに 9 版を重ねた出版物である。

17) 教科書出版社、東京書籍に併設されて、一般の閲覧のために公開している東書文庫には、江戸時代から今日に至るまでの教科書が所蔵されている。引用文は、ここの展示室にある教科書編纂に関する歴史資料の一つである。

- 18) 浅野梢英「レトリックと哲学」、植松秀雄編『埋もれていた術・レトリック』（レトリック研究会叢書5）所収、木鐸社、1998年、48頁。
- 19) 塩川徹也『パスカル考』岩波書店、2003年、285頁。
- 20) 松浪信三郎『考える葦——パスカルの生涯と思想』角川新書、1951年。
- 21) 串田孫一『考える葦』雲井書店、1951年。
- 22) モーリス・マルー編、田辺貞之助監修、島津智訳『世界ことわざ名言辞典』講談社学術文庫、1999年。
- 23) 東書文庫展示資料参照
- 24) 北村孝一『ことわざの謎——歴史に埋もれたルーツ』光文社新書、2003年、254-255頁。
- 25) 複数の大学に在籍する大学生（主に二・三回生）約500名を対象に2年間にわたって、「考える葦」という比喩の浸透度を調査した。質問は、以下の3項目である。①「考える葦」という比喩表現を知っていますか。②知っている人は、いつ頃、何によってそれを知りましたか。③「人間は一本の〈考える葦〉である」という文は、どんな意味を表していると思いますか。
- 26) 北村孝一、前掲書、5-6頁。
- 27) 山本省「『パンセ』の印象的な短い断章について」『信州大学教養部紀要人文科学第26号』所収、1995年。パスカルもしくは『パンセ』に関する教育学領域にかかわる研究としては、筆者が調べた限りではこの一編だけである。
- 28) 北村孝一、前掲書、171頁。
- 29) 谷川俊太郎「現代日本のことわざ」、柴田武・谷川俊太郎・矢川澄子編著『世界ことわざ大事典』所収、大修館書店、1995年、36頁。
- 30) この具体的な例の一つとして、「人間が考えるのもよしあしである」が紹介されている。現代の若い世代に属すると推測される作者が、ことばを遊ぶ感覚によって生み出したパロディと呼べるものである。（同上書、同頁。）
- 31) 皇紀夫「教育学における臨床知の所在と役割」『近代教育フォーラム No. 10』（教育思想史学会）所収、2001年、123頁。

（かわのようこ 京都大学大学院教育学研究科研修員）